

空想のひとりライフ～夢の中へ・巡礼編

ほうらい 満

青山ライフ出版

はじめに

2020年……第二生期と称し、魂は十九歳であるけれど、肉体は実質六十七歳、ふと気づいたら父親の亡くなった歳になっていた。今まで、命日は別として、あまりというかほとんどとっていいくらい普段の生活の中で父親のことを思い出すようなことはなかったのに（母親と比較したら雲泥の相違）、年頭から父親のことを時々思い出すようなことがあって、血圧が昨年くらいから高くなってきたこともその要因のささやかな一つであるとは思うけれど、もっと違う……何か……があるような気がして……父はもともと高血圧症で血糖値も高く、動脈硬化から脳軟化症を患い、社会人になって初めての正月、たまたま帰省していたときトイレで倒れ、そのまま寝たきりになってその年の十一月に亡くなった……のであるが、何故か去年までの自分と比較して、活力というか気力というか、よくわからないけれど、要は七十歳を過ぎてからの行動が自分の「人生の本筋」であるといきがっているわりには、その躍動感を阻害するようなきわめて軟弱な自分が見え隠れしていて、実際、疲れやすく、パート労働にもハリがなくなり……父親は生誕百十年、そして四十四回忌、五十年という節目にあと六年……この六年の意味……自分のこれからの六年は物質的に何とか今の生活パターンを続け、それから本格的な行動に移そうと考えているにもかかわらず。

そんなあっちいたりこっちいたり振り子のような

心境の中であって、やり残していた卒業研究論文というか、早期退職以来八年間積上げて生きた愚考登山の集大成というか、「しんげんだいぶんめいろん考」という愚作を書き上げ、そのことによって人生最期までやるのがハッキリし、同時に、できるかどうかは別として路上ライブのための新たな十三曲（最後の一曲は2021年作）のフォークソングが出来上がった。その中の二曲は父母を想ってつくったということもあって、秋風の爽やかさが少しだけ感じられるようになった九月の朝刊休刊日の前日の日曜日、その報告を兼ねて、天国紫微宮と書かれ父母をはじめ四柱が刻まれているお墓の前で、御霊たちがひっそりとたたずんでいそうなところで、屋外で二度目の、空想ではないひとりライブ（運命のピエロが側に立っていて）を許された。実は……それより三ヶ月前の六月、福島県いわき市の白水阿弥陀堂というところの東屋で、初めて弾き語って（一緒だった運命のピエロはスマホをいじっていた）みたのであるが、その時は、父母のフォークはできていなかった……。福島に行った理由は、福島第一原発事故、その廃炉作業や放射性廃棄物の処理問題等々が、特に新型コロナウイルス蔓延との繋がりを考えるようになり、人ごとではないような想いが強くなって、人生最期までの目標の一つ……福島と箱根を繋ぐ自分の「巡礼の道」をつくる……という願いをもってこれから生きていこうという決心から、作家・五木寛之の百寺巡礼にある白水阿弥陀堂を選んで、そこを出発点にしようと思った。いわき市の白水阿弥陀堂から箱根まで……箱根強羅にある光明台と神仙郷（開祖・カノンの根本聖地）は世界の霊的中心で、そこから巨大なブラックホールが無限大に、無限微に、大宇宙のはじまりに

向って伸びている。その到達点は宗教と科学の一致点で、いずれすべての人類はそこに帰結すると、ぼくは頑なに信じているのであるが……その途中経路は、五浦、鹿島灘、犬吠埼、九十九里、野島埼、鋸山、そこからフェリーで三浦半島へ、そして観音埼を想定している。

最近、愛媛松山の友人に送った手紙には次のようなことを……《T大学の創立者Mの「現代文明論」も再度じっくり読み返し……その中で、特に歴史の誘導作用というところ、神秘主義的な宇宙論への共感、さらに「人道」という言葉を「美意識」に置き換えることによって、ずっと前から愛読書になっている開祖・カノンの小論文や、今回読み込んだ武者小路実篤、志賀直哉などとの、主義主張という意味での共通項を見いだすことができました。理想を掲げる宗教に現実的な政治とそれら二者を繋ぐ教育らしきものに挑んでみようと「非核非武装非戦」ということを掲げ、一応試行錯誤してみたけれど、土台、我が浅はかな人生経験と限られた知能では不可能であって、「しんげんだいぶんめいろん考」を書きながら感じたことは、やっと「人生の本筋」に入ったことへの自覚であって、その結論として……非知性的な「手かざしの文化・ジェイ」を至高の芸術としてたたえただ漫然と実践すること、人をはじめあらゆるものたちの何気ない一瞬の美しさに感動すること、現実を支配する知性や欲望にできるだけ惑わされないこと……で、その三点をもって現実と虚構の狭間であがき続けながらも、焦らず無理なく淡々と生きていこうという結論に達しました。次は、「空想のひとりライブ～夢の中へ・巡礼編」を仕上げたいと思っています》と。

物たちでもコロナに感染するのだろうか？ と、そんな矢

先、約一年半前から東京で生活するようになった長男が置いていった大きなテレビの電源が入らなくなってしまい……結局、何も修理せず（結構修理費がかかりそうだったので）、新しい4Kテレビが我が家の住人となってしまった。同時に、録画だけできるHDDを取り付け、そんなに容量の多いものではないけれど、以前より録画する頻度が高まったのは事実で、そんな環境の変化に触れたかどうかは別として、「懐かしの映画音楽」という特番が録画されることとなり……でも、ぼくが学生時代にレコードで聴いていたようなレイモン・ルフェーブルの「シバの女王」などの曲を想定していたのだけれど、その予想はまったく外れ、1980年から90年代の映画がほとんどで、名前だけは聞いたことのあるタイトルもほんの少しだけあった……いかにその年代は殺伐としていたのだろうか……総合芸術としての映画鑑賞というものが普段の生活から完全に除外されていたことへの、変な嫌悪感をもってしまった。そのやるせなさを排除するように、最後の曲に、何故か、何故か、魅了してしまい……それは「This is me」という曲で、その映画は2017年の封切りで「グレイテスト・ショーマン」といって最近のものらしい。しかも、その曲を演歌歌手が着物姿で歌っていて、さすがプロって感じでのびのびとしたハリのある歌い方が、萎えていたぼくのところに躍動感を取り戻してくれた。それにしても「This is me」という英語を日本語に訳したときに、その奥に流れるところの吹きは、ポジティブな人とネガティブな人ではまったく違った表現になるのではないかと……と思って……ぼくだったら、そのように「これが、わたしです」って言い切れるところの奥ってどんな感じなのだろうと。今までずっと仮

面をかぶったような自分から、やっと素の自分を発見することができ、自分がめざす生き方・考え方もハッキリした今だから、ちょっと遅いけれど、そんな「This is me」をどう自分なりに訳したらいいのだろうか……たぶん、ネガティブ感覚で……少しうつむきかげんで……「いつでも、どこでも、誰でもできる〈ジェイ〉の大衆化……それが小さな魂に与えられた……This is me」といったキザっぽい感じにところが咬いているのではと……。

「シバの女王」のことだけれど、実は、昔、悪友と真夜中の東名高速をとぼし、下北沢に遊びにいったことがあり、たまたま喫茶店に入ったらあるシンガーソングライターがライブをやっていて、曲と曲の間のトークで彼がつくった問題を出して客に答えを求めるといったようなやりとりがあり、その中に「シバの女王」という答えを引き出す問題が出され、確か、フランス語では「シバ」を「サバ」と発音するらしく、問題の詳しい中身は忘れてしまったけれど、確か、魚のサバを引っかけたような内容で、一番前に陣取っていたぼくが答えたということ、ふと思い出し、そのちょっとした場面があって、実は、そのささやかな思い出が、前作の「空想のひとりライブ～夢の中へ」の架空の喫茶店へと繋がっていったのである。

今までゴールのない世界をむやみやたらに走り続けてきたような気がする。ずば抜けた精神力も体力もないくせに。高度成長という時代のせいにはできないけれど、競争意識だけが異様に熟成されてしまい、常に何かに向かって挑むというより闘っていたように思う。やがて熟成したつもりの競争意識が腐食して、そこから放たれる異臭を覆い隠すために仮面をより厚くしてしまったのかもしれない。1970年を日本社

会の分岐点と位置づけ、もう一度その時点に意識を戻してやり直してみようと思い、なかなか切り切れない仮面を脱ぐために、第一生期（1953～2018）のハンポと第二生期（2018～・・・）のイッポ、そして運命のピエロという女性が登場し、イッポが先導役となって会話しながら進める愚考登山の中でふと気づかされたことは、その仮面を脱ぐためにはまず走ることをやめ立ち止まることだと思ったのだけれど、生来のせっかちというか、焦りと無理というやつが張り付いていて、それに自我と悪しき執着が覆い重なってしまいはがすことに多少時間はかかってしまったけれど、冒頭述べた亡き父親のことを思い始めてから不思議にもやっと立ち止まることができ、立ち止まって気づいたことは……「待つ」ということの大切さであった。1970年を意識してたまたま「日本人とユダヤ人」という本を読んでいて、遊牧民族と農耕民族のさまざまな対比が綴られていて、それを鵜呑みにすれば名実ともにぼくの性向は間違いなく後者であるのだけれど、ぼくは以前から、純やまと民族の源流はもともと遊牧や騎馬民族の交じりあった民族で、さまざまな同系の民族との戦いに敗れ逃げ惑いながらユーラシアの東方に追いやられ最後に辿り着いたところが日本列島だったのではないかと、その後、定住しなければならぬ環境に馴化しながら、山の民、海の民、川の民となって土着していったのではないかと、いわゆる平安貴族社会やその後の武家社会は後々やってきた渡来人によってつくられていった社会構造ではないかと……ぼくの性向の中にも遊牧的なものがある、それはハンポの時代、海外雄飛とか放浪の旅とかに憧れ（そんな勇気もないくせに）たり、所帯をもってからも持ち家を得たいとい

う思いもあまりなく（バブル期で諦めもあったかもしれないけれど）、むしろあまりひとところに定住するというよりいろんなところで生活してみたいという好奇心が旺盛なもののためではないかと、思ったりもするのであるが……。開祖・カノンは「やまと魂とは松のころである。松のころとは時節を待つころであり、いつまでも変わらぬ誠である」と説かれていて……。それを知ったときから、ぼくの中で「待つ」と「誠」が一つになったのだけれど、「日本人とユダヤ人」の作者は、ユダヤ人が旧約聖書の言葉を二千年も待ち続けていたという感覚は、日本人の「待つ」とは雲泥の相違があると書いているけれど、いつまでもかわらぬ「誠」という意味では、純やまと民族の魂たちは、生き延びる糧としてやっていた魂を浄化する行為がいつの日か忘れ去られてしまい、長い間ひそかにその復活を待ちつづけていて……。それは……。ジェイ……。「分け隔てなくすべての人間が幸福に生きるための核心のわざ」であると……。ぼくは、頑なに言い切れるようになり、「待つ」ということでは、純やまと民族は、ユダヤ民族がパレスチナへ帰ることを二千年以上願っていたことよりもっと長く、三千年以上、いつでも、どこでも、誰でもできる〈ジェイ〉を日常生活の中に定着した世界の実現を願い、ひたすらその時機の到来を待ち続けているのではないだろうか……。その痕跡らしきものはまったくどこにもないけれど、きっと、先人が遺した「手かざし土偶」というものが地下深く眠っていて目覚めの時を待っているような気がして……。

日本社会の分岐点とした1970年を改めてネットで調べて、さまざまな出来事がある中で、下記四つのことをチョイスした。作家・石牟礼道子が大宅壮一ノンフィクション賞を

蹴飛ばしたこと（感想……さすがあ、やるぜえ……）、映画監督・山田洋次が民子三部作の最初の「家族」を出したこと（感想……男の夢にただ黙ってついてくる女性のけなげさと弱音をはかない女性の本当の強さを実感、そしてこんな女性活躍社会がこれからの日本社会に実現すればいいのにと……また「故郷」のワンシーン……デパートの食堂で夫婦が食事をしていて、夫が美味しい美味しいとほおぼっているところに妻が自分の分をわけてあげたところにもものすごく感動したことを思い出す……さらに「遙かなる山の呼び声」では、「待つ」ということと「誠」ということが具体的に一つになって表現されているような気がしてきた……）、登山家・植村直己が世界で初めて五大陸最高峰登頂を成し遂げたこと（感想……ここまではとても無理だけれど自分ももっと難易度の高い登山に挑みたかったなあという、すべてのことに中途半端な自分を振り返る……）、歌手・由紀さおりの「手紙」がヒットした年であること（感想……こんな手紙をもらえるような別れ方でなかったことへの軽薄な自分への後悔と謝罪は永遠に尽きない……）。そういえば、今、「青春の門・漂流篇」が枕元に……作家・五木寛之の生涯のライフワークと称する「青春の門」は、1970年頃からの愛読書である。デラシネ感覚にたまらなく憧れるけれど、そのような自分づくりに挑んだことはない。気弱な自分はフィクションの世界に入り自分でない自分を妄想する……。

2020年、10月21日、午前4時、夜明け前の天空は久しぶりに星々が散りばめられ、東は異様に大きな明けの明星、南は何ととってもオリオン、そしてシリウスの大いぬ、プロキオンの小いぬ、ポルックス、カストルの双子などがき

わだち、北はヒシヤクを地平に突き刺すように北斗七星、その頂点から斜め左上延長線上にはポラリス、西は耀きを増した火星が寂しく沈み去ろうとしている……そんな星空をみていたら……空想のライブ、その会場がやっと決まった。それは、福島から箱根までの「巡礼の道」の中間点、水戸市にあるカノン信仰の宗教施設……1986年、ぼくの専従生活はその会館から始まった。コロナ以前のソーシャルディスタンスを考へる必要ない時代は、五百人以上は収容できる大きな会場である。しかし、今……集まっているのは十数名、そのほとんどが顔見知りである。